

## 病虫害情報 No.1

茨城県病虫害防除所

## 小麦赤かび病の適期防除を実施しましょう！ 開花期間に高温で曇雨天が続くと発病が多くなります

本病原菌は、麦の開花期から10日程度の間が最も感染しやすく、この期間に降雨が続き、気温が20以上と高いと本病の発生が多くなります。

## [現在の状況]

小麦の出穂期以降、5月第1半旬までは感染好適条件は少なかったが、第2半旬になって感染を助長する条件が続いた。

向こう1か月の気象予報(5月5日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多いと予想されている。本病原菌の孢子飛散量は、気温の上昇とともに増加し、特に降雨後に多くなる。小麦は赤かび病に感染しやすい時期であるため、今後の気象に十分注意し、的確な防除を実施する。

## [防除対策]

小麦の薬剤防除の適期は、開花期(出穂後7~10日頃)である。表1を参考に適期防除に努める。発病の好適条件が続く場合などは、1回目の薬剤散布の7~10日後に2回目の散布を行う。ただし、薬剤によっては出穂後1回しか使用できないものもあるので注意する。

薬剤散布後、降雨が予想される場合は、粉剤よりも液剤、水和剤、乳剤、フロアブルなどの方がより高い効果が期待できる。

薬剤散布の際は、周辺作物等への飛散(ドリフト)に十分注意する。

本病は、過湿な圃場で発生が多いため、明きょ等で排水対策に努める。

収穫が遅れると、被害粒から健全粒へと感染が広がる恐れがあるため、適期収穫に努める。また、収穫後は速やかに乾燥・調製を行う。

グレーダー等による粒厚選別(2.4mm以上)は被害粒の除去に有効である。

表1 麦類および小麦の赤かび病に登録のある主な農薬(平成18年5月1日現在)

薬剤名	希釈倍数・使用量	収穫前日数 - 本剤の使用回数	対象作物	有効成分 - 有効成分の総使用回数
コロナフロアブル	400倍	- - 5	麦類	硫黄 - 5
ストロビーフロアブル	2,000~3,000倍	1 4 - 3	麦類	フルシムダキル - 3
チルト乳剤25	1,000~2,000倍	3 - 3	小麦	プロコザール - 5 (根雪前は2, 春期以降は3)
	8倍(無人機散布)	7 - 3		
トップジンM粉剤	4kg/10a	1 4 - 3 (出穂期以降は1)	小麦	チオファネートメキル - 3 (種子への処理は1, 出穂期以降は1)
ベフラン液剤25	1,000~2,000倍	2 1 - 5 (出穂期以降は2)	小麦	ミカダジン - 5 (種子への処理は1, 無人機散布は2, 出穂期以降は2)
ベルコート水和剤	1,000~2,000倍	2 1 - 5 (出穂期以降は2)	小麦	ミカダジン - 5 (出穂期以降は2)

農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用方法・注意事項等を確認のうえ使用してください。